

せっかち 園長の ひといごと

2016、4、28

認定こども園あかみ幼稚園・メイプルキッズ 統括園長 中山昌樹

あらためまして、お子さんの**進級、入園、おめでとうございます。**



メイプルキッズ・あかみ幼稚園は、お子さんが**一生を生き抜くための、『生きる力』の土台を作る場所**です。

『遊び保育』 → アクティブ・ラーニング → 新・大学入試制度（2020年からスタート）
 （乳幼児期の教育） （小・中・高の教育） （大学教育…暗記ではなく知識をどう使えるか）

そして、このような本園の教育が**より成果を上げるために必要な**のが、皆さんと私たちとの間に作られる、「**子どもの育ちを共に喜び合える関係**」です。 親・保護者の皆さんと私たち（園・教職員）には、それぞれの立場や思いの違いがありますが、真ん中にいる子どもの幸せを願わない大人は一人もいないはずです。平成28年度も、「**子どもの育ちを共に喜び合える関係**」を大切にしていきたいですね。よろしくお願いします。

さて私たち（園・教職員）は、本園を「あかみシップ」という船に例えています。これは大きな帆で風を受けて進む船です。この船には、メイプルキッズ（0・1・2歳）、あかみ幼稚園（3・4・5歳）、そしてみちくさ（小学生）などが乗っています。



職員が作った紙芝居

私たち「あかみシップ」が目指すところは、「子ども島」。

「子ども島」では、子どもの存在そのものが温かく受け入れられていて、子どもが安心して暮らせて、子どもが思いっきり遊べて・・・そして遊んだ結果として、子どもは学力含めた生きる力の土台を育む・・・そして、そのような子どもの育ちを親・保護者と保育者たちが一緒に喜び合う。そんなところが「子ども島」です。

ぜひ皆さんも、あかみシップが子ども島に向かう航海に参画してください。そして、一緒に子ども島を目指していきたいです。

さて、池本美香さんの記事の紹介

左に紹介するのは、朝日新聞（4/24）です。確かに、有名なあのブログのおかげで、子育ての大きな問題が国会で議論されるようになりました。

ですが池本さんの言うとおり、待機児童問題は子どもの教育や子育てにかかわる問題の入り口に過ぎないですね。

それ以前に、都会でない大部分の地方では、待機児童問題はなく、逆に子どもの数が減って大変という少子化の問題が深刻になってきています。

ようやく国会で子育てのことが話題になったのは歓迎すべきことですが、大切なのは、今後21世紀の教育・子育てはどうあったらいいのか、ということではないでしょうか！

このことに関して、本園が舞台になって作られた本「認定こども園がわかる本」が、このように紹介されたのは、とても光栄だし、親・保護者の皆さんと私たち（園）が今まで以上に力を合わせて、地域の教育・子育てに貢献したいという思いを強くします。

（個人的には、ノーベル経済学賞を受賞したJ.ハックマンの本の次に紹介されているのが、スゴイな！と自己満足しています。）

ひもどく

待機児童

日本総合研究所主任研究員

池本 美香

「子育て」という政治
少子化なのになぜ待機児童が生まれるのか？

猪熊 弘子(著)

角川SSC新書
864円



幼児教育の経済学

ジェームズ・J・ハックマン(著)

大竹文雄解説
古草秀子訳
東洋経済新報社
1728円



認定こども園がわかる本

中山 昌振(著)
砂見 幸寿(監修)

風鳴舎
1944円



「保育園落ちた日本死ぬ!!!」と題したブログが2月、話題を集め、国会にも母親の声が届けられた。だが、乳幼児を抱える親には、待機児童解消を訴えるための時間的・精神的な余裕はない。ここから議論を前進させるには、当事者以外の人の行動が重要になる。投稿されたブログも、国会に届けられたからこそ力になった。保育園に落ちた孫のために、市長宛てに異議申立書を送った女性もいたが、そうしたまわりの行動も今後を左右する。

量だけでいいか

しかし、なぜ小学校に入れない子どもはいないのに、保育所に入れない子どもがいるのか、制度や現場の実態などは、一般の人にはまだ十分に知られていない。

「子育て」という政治 少子化なのになぜ待機児童が生ま

保育への投資はハイリターン



国会議員会場の抗議行動

れるのか？」は、こうした素材な疑問から丁寧に説明してくれ。幼稚園と保育所の違いといった基本的な制度の解説から、保育事故、子どもを保育園に入れるための「保護」・「保育士不足」といった現場の実態が具体的な事例とともに論じられ、日本の保育の全体像をつかむことができる。

保育の質に関する面積差を緩和する。本書で示される保育所での和の実証実験では、子ども一人あたりの面積が狭くなるにつれて赤ちゃんが泣き始め、保育士に余裕がなくなっていたという。先月、政府は待機児童解消に向けた緊急的対応として、基礎和による受け入れを自治体に要請したが、子どもの側から眺めれば、保育所に入れたとしても単純に言えない状況がある。本書で示される保育所での

死に事故や保育者による虐待の事例には、本心に心が痛む。住居では保育施設反対運動が起るため、騒音や振動のある高層下の保育園も増えている。財政的な観点から、今は質の改善より量を増やすことに議論を集中すべきだとの見方について、保育への投資はハイリターンが大きいという議論を紹介する。「幼児教育の経済学」も参考に、所得や労働生産性の向上、生活保護費の低減などで潤った就学前教育の社会全体の投資収益率は、15〜17%と通常の公共投資ではありえないほど高いのだという。

将来ビジョンを

教育政策において、これまで幼児期は重要視されてこなかったが、ノーベル経済学賞を受賞したハックマン教授の「就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の教育にある」との研究

結果は、各国の保育政策の充実に大きな影響を及ぼしている。海外では保育への公的補助を増やし、親の就労の有無に関わらず、すべての子どもに質の高い保育を保障する方向に力を切る園が増えているのだ。日本でも子どもの権利や公的投資の正当性をふまえた保育の将来ビジョンが必要だ。「認定こども園がわかる本」では、イギリスの先進的な取り組みに感銘を受け、全ての子どもを対象に質の高い教育保障を目指す認定こども園の事例が詳細に描かれている。子どもにとって、保育者にとって、親にとって、地域にとって、園はどうあるべきか、丁寧な検討と実践があり、投資すべき保育の姿が見えてくる。単に数が揃うように預け先を増やすだけの待機児童対策では、園を増やしたり、保育士の賃金を上げるための財源の確保に効果は薄いく。これからは、多様な人が様々なかたちで園とかわかり、かわることで元氣になり、地域全体が活性化するように保育の力を発揮するべきだ。本書の表紙のように、背広と緑の服とで友達と遊ぶ楽しさ、すべりの子とともに保護することを急がねばならない。待機児童問題はほんの入り口の議論にすぎない。

◇いけもと・みか 60年生まれ。著書に「失われる子育ての時間」、編著書に「強が参画する保育をつくる」など。

このような、21世紀型の保育・教育実践ということでは、「認定こども園がわかる本」の監修者である汐見先生も、下のように発言しています。



汐見 幸
本音エッセイ

地域の中の園 これからの姿

あなたの園は地域で存在感を出せていますか？
2016年度は、地域の中の園のありようについて考えます。

執筆 汐見 幸
(白眉学園大学 学長)

園を21世紀バージョンへ

新制度が始まった。21世紀前半の日本は、現実には子どもの数がさらに減っていく可能性が高い社会で、しかも、高齢化が深刻化する社会でもある。出生率が1・4前後を続けていくと、2055年頃にはいちはばん人口の多い世代が84歳になるといわれる。75歳以上が2000万人もいるのに、毎年生まれる子どもは50万人以下。小学生以下の子ども数が1000万人に満たないのに、75歳以上の高齢者はその2倍も3倍もいる社会になる。

そうした時代に、どうすればどの世代も元気で生き生き生きていくことができるのだろうか。その地点はどこになるのだろうか。これからの幼稚園、保育所、認定こども園は、そういう中でどういう役割を果たしていけばいいのだろうか。

そうしたことを考えて園の新しいあり方を懸命に模索しているところがたくさん出てきている。その1つが、栃木県佐野市にある認定こども園あかみだ。

認定こども園の大きな課題の1つは幼稚園タイプ（1号認定）の子どもの保護者と、保育所タイプ（2号、3号認定）の保護者とが、会や園の行事の手伝いなどに参加できる条件が大きく異なっているということだ。会の時間を合わせることも1つでも大変だ。

そこで、あかみ幼稚園では、どの保護者も自分の日程の都合に合わせて園の行事などに参加できるような制度をつくった。1号認定の子の保護者は2号、3号認定の子の保護者がそんなに時間が取れないことはわかっていて、でもだからといって、1号認定の子の保護者だけでこれ進めてはおかしくなる。そこで、3歳児以上の子の保護者は、だれもが子どもたちのために何かをしてもらう、例外はつくりたくないことをまず決めた。でも条件がそれぞれ違うから、各人が自分の都合のつく時間に参加すればよいという

「サポート係」という制度をつくった。サポート係は、自分の都合のつく時間に、草むしりや絵本修理などを手伝う。これをだれもがするわけだ。

興味深いのは、園内に「子育てママカフェ（リードット）」というカフェを別棟でつくり、そこがカフェやリサイクルショップ、気軽なたまり場等として運営されていることだ。この運営も保護者が自発的に、保護者の側の責任で行っている。さらに、自主グループ（サークル）をつくり、畑をつくらせたり、アートめぐりをしたり、アフリカの音楽や文化にふれる活動をしている。ほかにもあるのだが、総じて、あかみ幼稚園の保護者は、園に子どもを預けることによって、人間関係の面でも、文化的行事への参加の面でも、育児協働の面でも、それ以前よりも豊かになり、役立ち感や親としての喜びなどを無理なく手に入れている。これは21世紀型の幼児教育施設の進むべき有力な方向を示している。ぜひ参考にしてほしい。

プロファイナル 汐見 幸 (しおみ としゆき) / 白眉学園大学学長、筑波大学名誉教授、専門は、保育学、教育人間学、育児学、臨床心理・保育研究など、園児の個性を中心とした研究を長期実施。著書に、「津島はいい小学一年生」(ポプラ社)など。

さて今回の最後は、子どもとスマホについて・・・

今の子どもたちの生活環境には、文明の最先端の機材があふれており、未来を担う子どもたちは、私たち大人以上に簡単に、しかも早く、それらを使いこなしてしまいます。

私は、このこと自体は素晴らしいことだし、そのような子どもたちを見ているとワクワクするし、そこに未来に対する希望のようなものも見えてくるのです（ちょっと大げさ?）。

しかし、園長という、子どもの育ちに関する専門家として、ちょっと心配な面があることも事実。その一つが、右に紹介する読賣新聞です（3/21）。

何が正しい答えなのかは、少なくとも今はわかりませんが、私としてこれは確かだと思うのは、そのものをきちんと使いこなせる力や態度（それを、リテラシーというのでしょうか）が重要だということ。

スマートフォンの利便性と、リスク。何事もそうですが、便利なことが増えれば、そこから難しい問題も出てくる。右の記事にあるような学力との関係、あるいはいじめなど子どもの人間関係の問題、さらに様々な犯罪との関わり……。子どもたちがスマホに親しむ際には、ぜひ、そのリスクにも関心を持ちたいものです。

メールは utsunomiya@yomiuri.com へ

学力高い子スマホ使用短く

学力が高い子は、本や新聞を読み、スマートフォン（スマホ）の使用時間が短い。宇都宮市教育委員会が市立小中学生を対象にした調査を分析したところ、そんな傾向があることが分かった。

同市は昨年12月、小学6年「まる」「まああてはまる」と生4580人と中学3年生4286人を対象に「学習内容」「学習態度調査」と、全小中学生4万6477人を対象に「学習」と生活についてのアンケートを実施。調査の正答率の高い順に児童・生徒をA、B、C、Dに分け、アンケートの結果との関連を分析した。小6ではアンケートの本小6ではアンケートの本で最も高かった。平日1日のや新聞を読んでいるか」との携帯電話やスマホの使用時間問いに対し、「とてもあてはまる」と答えた割合、Aは平均19%

また、正答率が高いグループほど、携帯電話やスマホの使用時間も短かった。所持率はAが38・8%、Dは57・9%にとらまると生活についてのアンケート。また、正答率が高いグループほど、携帯電話やスマホの使用時間も短かった。所持率はAが38・8%、Dは57・9%にとらまると生活についてのアンケート。

宇都宮の小中生に調査

本や新聞読む傾向

学力が高い子は、本や新聞を読み、スマートフォン（スマホ）の使用時間が短い。宇都宮市教育委員会が市立小中学生を対象にした調査を分析したところ、そんな傾向があることが分かった。

同市は昨年12月、小学6年「まる」「まああてはまる」と生4580人と中学3年生4286人を対象に「学習内容」「学習態度調査」と、全小中学生4万6477人を対象に「学習」と生活についてのアンケートを実施。調査の正答率の高い順に児童・生徒をA、B、C、Dに分け、アンケートの結果との関連を分析した。小6ではアンケートの本小6ではアンケートの本で最も高かった。平日1日のや新聞を読んでいるか」との携帯電話やスマホの使用時間問いに対し、「とてもあてはまる」と答えた割合、Aは平均19%

また、正答率が高いグループほど、携帯電話やスマホの使用時間も短かった。所持率はAが38・8%、Dは57・9%にとらまると生活についてのアンケート。

分、Dが54分で、正答率が低いグループになるほど使用時間が長かった。

中3も、正答率が高いグループほど、本や新聞を読んでいる生徒の割合が高い一方、スマホの所持率は低く、使用時間も短い傾向がみられた。

学習習慣に関するアンケートでは、AとDの差が最も大きかったのは、小6では「自分の考えを根拠をあげながら話す」で、中3では「テストでまちがえた問題はもう一度やり直す」だった。

同市教委学校教育課は「スマホや携帯電話を深夜まで使うと健康上も良くないし、日中の集中力にも影響する」として、学校や保護者に今回の分析結果を伝え、生活習慣や学習習慣の改善につなげていく方針としている。

◎正答率上位グループと下位グループの差が大きかった主な設問

アンケートの設問	小学6年		中学3年	
	A	D	A	D
自分の考えを根拠を挙げて話すことができる	84.5%	57.7%	85.8%	56.5%
本や新聞を読んでいる	75.5%	57.9%	60.9%	50.9%
自分の携帯電話やスマホを持っている	38.8%	47.1%	53.6%	70.7%
平日の学習時間（塾や家庭教師も含む）	1時間41分	1時間	2時間42分	1時間58分
平日の携帯電話やスマホの使用時間	19分	54分	1時間	1時間45分